



## 古代の人口 -現代とのズレ-

今から1000年以上前、古代の常陸大宮市域にはどれくらいの人々が住んでいたのでしょうか。

10世紀中頃に成立した辞書『倭名類聚抄（わみょうるいじゅしょう）』によれば、那珂（賀）郡は22郷、久慈郡は20郷を擁する、共に全国屈指の大規模な郡でした。その各郷の比定地には諸説ありますが、私見では那珂郡の朝妻・那珂・川辺各郷の全域と阿波郷の一部、久慈郷の岡田・八部・真野各郷の全域と倭文・河内・余戸郷の一部が、現在の市域に含まれると考えます。とはいえ、古代の郷（里）は50戸で構成される行政機構で、50戸を維持するために離れた村々を統合することや、一つの村を分断することもあったと考えられます。この点からも、「〇〇郷は△△」と厳密に当てはめるのではなく、「だいたいこのあたり」で理解するのがよいでしょう。

ただし、このような郷（里）の構成は、当時の人口を考える上ではむしろ好都合です。なぜなら、8世紀に作成された戸籍を分析すると、1郷あたりの平均人口は1,068人で、地域差も特に見られないため、ここからある程度の予測が立つのです。少々強引ですが、先述の諸郡のうち部分的な4郷は半分が市内に含まれると仮定し、全域が該当する6郷と併せて計算すると、市域内の人口は約8,500人になります。この想定は元の設定が甘めなので、実際には8,000人程度と考えるのが妥当でしょう。



▲玉川（上村田地区）



古代・中世史部会専門調査員 長谷部 将司 氏  
(茨城高等学校・中学校 教諭)

この人数を多いと捉えるか少ないと捉えるか、参考までに同じ計算をすると、現在の水戸市域の古代の人口は約10,700人となります。さらに、当時の日本全体の人口は500～600万人ですので、古代の常陸大宮市域では現在の感覚よりもはるかに多くの人々が居住し、生活を営んでいたことがわかります。なぜならば、古代の土木・治水技術では那珂川・久慈川のような大河川を管理できないため、大河川に注ぐ中小河川の周辺や、山地から流れ出た水が平地に注ぐ境目としての谷間に田地が営まれ、その近くに集落が形成されたためと考えられます。

常陸大宮市域では、特に那珂川水系の緒川と久慈川水系の玉川が農耕のための重要な河川で、先述の市域内の諸郷も多くが両河川の流域に集中しています。また、農業のみならず、緒川流域では林業、玉川流域では織物業や鉱業といった、多様な経済活動が活発に行われていたこともうかがえます。

なお、このような活動の一端は8世紀成立の『常陸国風土記』でも確認できます。そのため、今後とも引き続きこれらの史料を深く読み込み、さらに詳細な地域の実相を描き出すことができると考えています。

### ■問い合わせ■

文化スポーツ課

文化・スポーツグループ ☎52-1111(内線344)